

いることは正鵠を射た見方だと思ふ。

青森県立図書館郷土双書二

青森県立図書館協会発行

頒価 六百元 送料 四十五円

中道 等著

## 三沢市史

小熊 健

故人となつた著者の中道氏は、「青森県史」の編纂者として有名であるばかりでなく、地方史関係では「甲斐村史」「十和田村史」など数多くの著書があり、また民俗学関係でも、大正十四年「津軽旧事談」を著わしたり、「民俗芸術」「旅と伝説」等に数多くの論考を寄せている。このような実績を高くかわれ、三沢市にある小川原湖博物館長として迎えられ、民俗資料の収集につとめるなど、郷土関係では生字引として、その博識ぶりを知られていた。

このような著者の手になる「三沢市史」を紹介すること、若輩の身にとつては至難のことであるが、内容の紹介をしながら感想を述べてみたいと思う。

「三沢市の歴史は」と問へば、多くの人は、戦後「基地の町」として発展した三沢を思い浮かべ、次に八戸新産業都市指定以後の大きく変わるのではないかといわれている三沢を考へるだらうと思う。このように、三沢の歩

みは新しく特殊なものとしてより認識できない人の多いことは否定できない事実である。そこで、市史編纂の趣旨は、三沢の歴史を見直し、この三沢市にも連綿と続いてきた歴史のあつたことを明らかにするところにあつたようである。

序によれば、中道氏は大正十二年に「青森県史」の資料収集のため、広沢牧場をはじめ三沢市周辺を訪ねている。このときの資料によつて氏の構想ができあがつたといつてもよいであらう。

「三沢市史」は上・中・下三巻からなつてゐるが、上巻では「地勢」「地名」「藩の林制」「新田開発」「木崎牧」等を取り上げている。ここで注目されることは、寛永十八年（一六四一年）、「御野守」に任じられ、以後代々就任している小比類巻家の所蔵文書を引用していることである。この文書により空白とされていた三沢の歴史が明らかになつてくるのである。「小比類巻文書」には御野守の謁見の記録や御野守の進退に關する文書があつたり、また御野守には諸役免除の特典が与えられていたことが記されているなど、非常に興味深いものがある。

「新田開発」では、三本木平開墾で有名な新渡戸伝の三沢方面の開墾計画と「小比類巻文書」とを突き合はせて、上巻における開墾の経緯を詳らかにしている。

上巻で最も力を入れているのは「木崎牧」であり、二

百頁あまりをさいている。これは著者が木崎牧を追究することこそ、三沢市の、そして三沢人の特異性を解明する鍵になると考えたからと思われる。そのため、わが国の馬の歴史からとまおこし、南部藩直営の九牧場におよび、木崎牧を詳述している。

「奥隅馬誌」「南部馬史」などの引用が目立つが、特に明治四十二年に発行された広沢安任の「奥隅馬誌」は六十頁のものであるが、引用された部分をまとめてみると、実に三分の一にあたっている。著者はこの「奥隅馬誌」を骨にし、「小比類巻文書」で肉付けをして、木崎牧を立体的に組立てている。ただ「奥隅馬誌」は青森県叢書にも所収されていることでもあり、要約して紹介した方がすっきりしたものになったような気がする。

「小比類巻文書」に、死馬に関する丹念な記録があるところから、木崎牧経営が必ずしも容易でなかったと推定できる。この木崎牧に関連するものとして、下巻では「広沢牧場」「明治年間の畜産」などを取り上げ、産馬の趨勢をみている。

上巻ではこの他「地名」にもかなりの頁をさいている。それは市史を展開するにあたり、地名をいろいろな角度から紹介することにより、市史に親しみをもちとせる役割をなしている。地名の解説には「郷土誌」(注一)や「郷土調査書」(注二)をもとに、著者がアイヌ語や歴史的説明を加味している。ただ地名は複雑なものであり、

各方面から検討しなければ断定できないといわれている。そのため三沢の地名に興味がある場合には、アイヌ語地名を言語学的に正しく見きわめている金田一京助氏の著書、民俗学的立場からの柳田国男氏「地名の研究」、東北地方に関する著述が多く、地名を地理的に説明し、三沢の川目集落を取り上げている山口弥一郎氏「開拓と地名」などを鑑み、再度市史の説明を見直したなら、より一層深い理解が可能になるものと思われる。

中巻では「三沢の歴史的概観」「斗南藩」「三沢の修験宗徒」などを取り上げている。

「三沢の歴史的概観」では、平泉の藤原氏や南部氏の支配などを詳述している。この頃は著者の最も得意とするものの一つであり、三沢の歴史の空白を埋めるためのものであろうが、やや長文にすぎる感がある。このことについて凡例で、「東奥一般の史的推移を知る上から」と古今この市町村でも多少の関与のあったことなどを知り得る手引としたものであつて、これによって新たな文献その他の発見を期待したために記述したものである。と述べている。しかしあまり強調すると、著者が大正十五年に郷土資料の不足を痛いについて「これらへ各郡町村の郷土史風土誌類」に記された史的沿革に関する資料、又は伝統談は、実に千遍一律であつて、多少の目覚しい材料がないでも無いが、まことに力強く胸に響いて来ぬ感がある。たとえば何々郷土史とある村落の名

ま、己が好む儘に置き替えて見ても、あまり異動などは認められぬほど、共通したる。」(注三)と述べているが、これと同じ弊に陥る恐れが出てくるのである。

「斗南藩」の記述では、戊辰前、幕末の世相から説きおこしているが、市史編集当時未刊本であつた「青森県歴史」などを用い授産についてまとめている。また、三沢の南山および北山に移住した百戸の斗南藩士についてふられている。

中巻で他に特徴的なことは「三沢の修験宗徒」の記述である。「多門院文書」を中心に行っていることはいうまでもない。「多門院文書」は「概説八戸の歴史」「五戸町誌」等にも一部引用されているが、「総数約三千点と推定され」「ひとり修験道史の解明に役立つばかりではなく、室町期以前の青森県史暗黒時代にスポットをあてる事ができる」(注四)貴重な資料である。かつて筆者が小川原湖博物館で著者にお目にかかった際、郷土史関係で今後ものと明らかにしなければならぬものの一つとして修験道をあげておられたが、長年にわたつて未刊書の探究を続けてきた著者には、「多門院文書」は魅力のある資料であり、意欲をかきたてられたのではないかと思われる。

なお余談だが、著者が「五戸町史」編集にも食指を動かされたことがあつたように聞いているが、恐らくこの市史を編集しながら、「修験道」「木崎牧」「南郷藩」

などを追究することによって、著者の脳裡には、五戸の歴史がある程度粗立てられていたのではないかと想像している。

その他この中巻では、「冷害」「津波」「交通」「小川原湖」なども取り上げている。

下巻では、「世相の変遷と三沢」の項で行政区画の変遷にふれているほか、「砂鉄」「遺跡、遺物」「教育文化」等も取り上げている。また、「太平洋横断飛行」にもスペースをさいている。ここでは主として各種の新聞記事を引用して、当時を懐旧するような形で展開している。

他に著者の得意とする「年中行事」「郷土芸能」「伝説、民話」「方言」なども取り上げている。この民俗関係には「郷土調査書」の研究成果も取り入れられていることと、著者が小川原湖博物館長として年中行事の復元に努めていたこととあわせて、何も三沢と限らず郷土の民俗を知る上で参考になるものである。

最後の項で、「三沢の発達と其特長」として三沢の歴史を概観している。特長の一つは、「三沢市の地域は古い木崎の牧野であつた。それゆえに、他の市町村の発生的基本にみるような現象は、此土地には全く無いといつてよかつた。すなわち城下・商工業・純農漁村などの基礎による自然の発生が、人為を加えて次第に市街地に拡大したということはなかつたのである」。第二の特長

は、「第二次世界大戦が終り、新たにアメリカ軍が進駐し、ここにいわゆる基地を営んだ以後の發生にみることでできる」という。そして、この二つの基因が三沢市そのものの特質を形成したものと断じている。なお補遺として「八戸新産業都市指定と三沢市」や「開田、千拓」等にも言及している。

以上内容を紹介してきたが、ふりかえてみると、「三沢市史」は、三沢の歴史は決して特殊な歴史でなかつたことと「小比類巻文書」その他によつて具体的に示し、三沢の歴史を考えさせたことに大きな意義があつたと思う。ただ、腹目を中心に内容を配列しているので、もう少し歴史の流れがわかるように配列を工夫し整理してあつたらと思う。

なお著者は、「市民各位が日々生活するところに、三沢市史料の根源がひそんでおります。このことは、昔も今も変わりません。生活記録と改めて名をつけずとも、心算えのノート切はしも残りつものは立派な資料となるのです。」と、市民に、歴史に關心をもちよう呼びかけている。この言葉は、長年資料収集を行い、数多くの著作を発表した著者だけに実感として伝わってくるのである。

注一、根井分教場備付、大正三年。

注二、三沢尋常高等小学校「郷土の調査と各教科郷土化の実際」昭和十二年。

注三、中道等「津軽、南部の郷土資料に就て」、「書

誌」第三集、郷土誌料特別増大冊所載。

注四、小笠原二郎「修験道多門院文書の書誌的研究」、「うとう」第七十三号所載

(昭和三十九年 三沢市教育委員会発行

非売品)

斉藤 馨 著

## 岩館斎藤家盛衰記

桜庭 秀俊

津軽の旧家「岩館斎藤家盛衰記」。著者馨氏は斎藤家別家の九代目に当たるが、この別家は明和三年に二代甚助の三男惣助が別家したことに始まる。その後、両家は離合を繰り返しつつ、現在本家の直系が断絶したため、別家が本家を合併し、馨氏が引継いでおられるわけである。

本書は家蔵の資料を忠実に紹介し、又研究書を採用しながら斎藤家歴代を顕彰するのではなく、古文書の行間が語りかける歴代の声を私見や推理を主として、できる限り忠実に記録しようとする姿勢が強く感じられる。書物である。「旧家の多くは数代先にさかのほれば、その記録の覆れるものは極めて少ない。にも拘らず天正年代まで遡つての系図が明瞭に遺され且全国屈指の富豪にまでの上つた旧家は津軽地方には絶無といつても差支ないであらう。」と著者がいうほどもなく、岩館斎藤家は津軽遷